

「いま、この惑星で起きていること」

2021年12月01日

岩波書店の月刊誌『世界』に、フリーの気象予報士の森さやか氏が「いま、この惑星で起きていること」と題して、温暖化によって、地球に起こっている異常気候をはじめ、動植物に至るまでの様々な異変を、毎月寄稿している。12月号の24回目は「暗く、熱くなる地球」というテーマで、ブラジルとイタリア、そして、地球のことを報告している。

ブラジルの大統領はボルソナロ氏で、彼はブラジルのトランプと言われ、新型コロナを「ちょっとしたインフルエンザ」と言い、感染防止より経済優先政策を取っていた。アマゾンの森林を伐採し、農地に広げている。コロナの感染者数は米国の半数ほどだが、死者数は米国の77.6万人に対し、ブラジルは61.4万人（28日現在）で、世界第2位の死者を出している。ブラジルの国内電力は3分に2を水力発電で賄っているが、記録的な干ばつによって深刻な電力危機に陥っている。ボルソナロ氏は国民に、「明かりを消そう、なるべくエレベーター使用をやめよう、冷水シャワーを浴びよう」などと、当然の発言を繰り返している。強気一辺倒のボルソナロ氏が、常識的で大人しい発言をするのだから、並大抵の干ばつではない。世界最大級のダムと言われているイタイプダムの水位は例がないほど低下し、大河の水も減って、船は積み荷を減らして運航せねばならず、コーヒー農園には茶色の枯れ木が広がっている。渴いた大地から大砂塵が起り、大都市サンパウロでは死者が出た。深刻な水不足の背景には、温暖化、人口増加、アマゾンの森林伐採と火災がある。「世界の肺」と言われるアマゾンの森林が、今年の8ヶ月で、広島県に相当する面積が消滅した。電力不足を補おうと様々な手を打つが、効果ははかばかしくない。

一方、イタリアでは、今年の夏、記録的な酷暑が襲い、2ヶ月で5万件の山火事が発生した。火が燃え広がったのは酷暑のせいであるが、太陽光発電用地に変えさせるためにマフィアが火を放ったという不穏な憶測も流れている。ところが一変して、豪雨が押し寄せ、ミラノの空港は滑走路が水に浸かった。ある都市には、半日に740ミリの豪雨で、雨量記録を塗り替えた。オランダやドイツでも豪雨が襲い、200名以上の方が亡くなった。この規模の豪雨は、温暖化によって1.2倍から9倍も起り易くなったと試算されている。

宇宙旅行ビジネス時代を迎え、富豪たちは大金を払って、宇宙船に乗り込み、宇宙から地球を見、満面の笑みで帰還している。ところが、ここ数年、宇宙から見る地球の輝きに陰りが見え始め、急に薄暗くなっている。温暖化によって雲が減り、太陽光が地球外に跳ね返されにくくなり、地球が暗くなったという訳らしい。

自民党副総裁の麻生太郎氏は「温暖化によって、北海道で米が取れるようになった」などと、見当違いなことを言っていたが、国連事務総長のグテーレス氏は、「温暖化は人類にとって赤信号である」と危機を訴えている。イギリスのグラスゴーで行われたCOP26には、200の国と地域から集まり、温暖化対策が話し合われた。緊急課題であることは一致した認識であろうが、肝心の石炭火力発電は「段階的廃止」ではなく、インドが発言し、中国が賛同した「段階的削減」ということになった。石炭火力発電に頼る日本は、内心安堵したのではないかと。温暖化は大幅に後退した訳である。議長のアロック・シヤルマ氏は声を詰まらせ、「申し訳ない」と謝罪をしていた。世界は、経済の減速を承服できないのである。Z時代と言われる若者たちは、自分たちは生きられないのではないかと、怒りを込め、経済のみを優先し、貧富の格差を生み出す資本主義から脱却し、正義と公平を求める社会への変革を訴えている。彼らの訴えに政治家たち、大人たちはどう応えるのか。